

向陵会が龍谷大と連携

キャンパスカフェが拠点

社会福祉法人向陵会（京都府向日市）が、龍谷大学（京都市）の委託を受けて運営している深草キャンパスの「カフェ樹林」が、社会貢献事業を生み出す拠点に発展している。20年前に開設された、知的障害者と学生が共に学ぶオープンカレッジが母胎。カフェに集った学生らが、靴磨き事業など障害者の働く場をつくるソーシャルベンチャーを次々と立ち上げている。

（関西支局・飯塚隆志）

カフェ開店のきっかけ 楽や芝居をつくり上げる通は、短期大学の授業として 年の授業で、障害者は「大て2002年に開設された 学に行ける」と歓迎した。オープンカレッジ「ふれあ 障害者は、学ぶ中で「働い大学」。学生と障害者が音 くこと」を次の目標にする

知的障害者の働く場

ようになり、龍谷大は「ふれあい大学」でも関係のあった向陵会に委託する形で06年春、知的障害者が働く「カフェ樹林」をオープンさせた。向陵会主任、河波明子さん（64）は13年に働き始めたが、当初、障害者らはけんかばかり。「面白くない」と思いながら、仕事をしていくからでは」と考え、ひたすら笑わせることを心掛けた。

カフェの運営に携わる一方、靴磨きなどを練習する。ここから、「革靴を履いた猫」（革猫、京都市）と「たいまつ」（京都市）が生まれた。「たいまつ」は、専門職だけでなく、一般企業も対象にして、障害者との向き合い方などの研修を行う会社だ。

革猫の社長、魚見航大さん（28）は、政策学部在学中の15年、障害者と共に靴磨きを習得、卒業直前の17年に革猫を立ち上げた。

一緒に靴磨きを学んだ藤

ケーションが取れた。コミユニケーションが取れて信頼関係が生まれたら、指示したことができるようになり、スキルも驚くほど上がった

河波さんは「カフェ樹林」を切り盛りしながら、龍谷大名誉教授の加藤博史さんと毎月、打ち合わせ。「チーム・ノーマライゼーション」が生まれた。チームと向陵会が一緒になって、カフェ樹林を教室にした「トリムタブ・カレッジ」

「トリムタブ・カレッジ」は「ボードゲーム」を学び、「靴磨き」「英会話」を実践する場を設けた。障害者らは、朝から昼過ぎまで

メモ

トリムタブ・カレッジは、かわい個人でも最大限の決意をもって正しいことを行えば、人類という巨大な船を動かさう、という米国の思想家、バックミンスター・フラー（1895～1983）の主張。ここから名前を取った。



カフェ樹林で学生と話し合う河波さん（右から2人目）龍谷大深草キャンパス